

令和7年度(第76回)芸術選奨
選考経過

令和7年度(第76回)芸術選奨選考経過一覧

部門	選考経過
演劇	<p>演劇部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として15名、文部科学大臣新人賞候補者として16名の推薦があった。伝統演劇から現代演劇まで、いずれも今日の演劇界を牽引(けんいん)する俳優・劇作家・演出家たちである。</p> <p>第一次選考審査会では、受賞者は各部門2名、同じジャンルからの受賞も拒まないことを確認した上で選考審査員各々が推薦理由を述べ、さらに推薦委員から寄せられた候補者を交えて忌憚(きたん)のない意見交換を行った。その結果、文部科学大臣賞候補5名、文部科学大臣新人賞候補8名まで絞り込んだ。なお、両部門にまたがる候補者の処遇については、第二次選考審査会で改めて検討することとした。</p> <p>第二次選考審査会では、まず検討課題について候補者の実績・将来性など細かく協議を重ねた後、文部科学大臣賞受賞者の選考に移った。結果、原作を生かしつつ、新味を加えて成果に結び付けたことが高く評価された齋藤雅文氏と、能の普及に心を砕いて、様々な場で観客の掘り起こしをしてきた努力が舞台に結実した、と評価された味方玄氏の受賞となった。</p> <p>また、文部科学大臣新人賞には世紀の歌姫マリア・カラスの孤高を浮かび上がらせた望海風斗氏と、伝統演劇の世界にあって、令和という新時代の幕開けを感じさせた尾上右近氏への贈賞を決めた。</p>
映画	<p>映画部門では、選考審査員と推薦委員から文部科学大臣賞11名、文部科学大臣新人賞11名の推薦があった。第一次選考審査会で文部科学大臣賞候補を6名に、文部科学大臣新人賞候補を4名に絞り込み、第二次選考審査会に臨んだ。令和7年度の審査の特徴は、歌舞伎界を活写(かつしゃ)した「国宝」から、李相日監督をはじめ多くの候補者が推薦されたことである。同作は実写邦画の興行記録を更新し、社会現象となるとともに、芸術的にも高く評価された。「本年は「国宝」に逆らえない」として複数人の授賞を望む声も根強くあったが、「「国宝」以外にも優れた作品があったことを芸術選奨として残しておくべきだ」との意見がわずかに上回ったこと、「李監督への授賞はスタッフや俳優の功績を代表してのものである」との考えから、文部科学大臣賞には、「国宝」と並ぶ評価を得た「敵」の監督である吉田大八氏を、李相日氏とともに選出した。文部科学大臣新人賞は、卓越した構成力と演出力を「遠い山なみの光」で示した映画監督の石川慶氏と、多くの意欲作に出演して演技の幅を一気に広げた俳優の広瀬すず氏への贈賞であり、異論は少なく多数意見を占めた。</p>
音楽	<p>音楽部門では選考審査員及び推薦委員から文部科学大臣賞の候補に11件、文部科学大臣新人賞の候補に14件の推薦があった。第一次選考審査会では書面を参考に意見交換し、文部科学大臣賞5件、文部科学大臣新人賞6件に絞り込んだ。第二次選考審査会では選考審査員が述べた所見に基づき、文部科学大臣賞2件、文部科学大臣新人賞2件を選出した。令和7年度の活動の評価に視点を置いた結果、国内外のオーケストラで目覚ましい活動をみせた指揮者の山田和樹氏と、古典曲から委嘱作までをまとめた独奏リサイタルで力を発揮した地歌箏曲(じうたそうきょく)演奏家の遠藤千晶氏が文部科学大臣賞となった。文部科学大臣新人賞は気鋭のクアルテット・インテグラと地歌箏曲演奏家で作曲家の中井智弥氏が選ばれた。弦楽四重奏団については受賞対象が「原則として個人」という規定との関係が議論されたが、受賞者は恒常的な活動を行い、一人の人格に等しい一体性を持つことが特に評価された。後者は新人賞としては業績が多いものの、二十五絃箏(にじゅうごげんそう)を含むリサイタルと自曲の新作歌舞伎において新規性があると評価された。</p>
舞踊	<p>舞踊部門では、文部科学大臣賞候補者として15名、文部科学大臣新人賞候補者として17名の推薦があった。第一次選考審査会において、慎重かつ公正に審議し、ジャンルも配慮した上で、文部科学大臣賞5名、文部科学大臣新人賞4名に絞り込んだ。</p> <p>第二次選考審査会では、過去の実績や将来性、舞踊界に与える影響などの視点を加え、さらに審議を進めた。その結果、文部科学大臣賞には、宮川新大氏と森山開次氏が満場一致で選ばれた。宮川氏は、令和6年度に続く同バレエ団からの選出について議論されたが、対照的な個性とキャリアが高く評価された。森山氏は、現代における価値観ある創作と今後の成長への期待から強く支持された。文部科学大臣新人賞には、共に推薦の多かった岩井優花氏と花柳壽輔氏が同じく満場一致で選出された。岩井氏は、選考期間において幅広い役による充実した舞台成果が高評価に、花柳氏は、流派の会であっても、大劇場で開催し、体力的・精神的な負担を乗り越えた点と将来性が大いに期待された。</p>

令和7年度(第76回)芸術選奨選考経過一覧

部門	選考経過
文学	<p>文学部門では選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者、文部科学大臣新人賞候補者としてそれぞれ12名の推薦があった。第一次選考審査会の結果、文部科学大臣賞、文部科学大臣新人賞とも5名に候補者が絞られ、第二次選考審査会で討議の結果、ほぼ全員の賛同を得て、次の受賞者が決まった。</p> <p>文部科学大臣賞には堀江敏幸氏の「二月のつぎに七月が」と、いしいしんじ氏の「チェロ湖」が選ばれた。前者は大衆食堂に集う人々の日常的な交流を描きつつ、そこに垣間見える心の揺れや奥行きを卓越した表現力で捉えたと評価された。後者はチェロの形をした湖を舞台に展開する一族の物語で、自然との共生が、音楽性あふれる散文と夢幻的なイメージで表現され、その自在なりアリティの懐の深さに評価が集まった。</p> <p>文部科学大臣新人賞には朝比奈秋氏の「受け手のいない祈り」と、大塚凱氏の「或」が選ばれた。前者は救急医療に携わる主人公が心身の限界に追い込まれながら、同僚や患者の生と死に向き合う様子を圧倒的な描写力でとらえたと評価された。後者はリズム、文法、題材から、イメージの動かし方、テーマの展開まで多方面で俳句の可能性を広げた画期的な作品と賞賛された。</p>
美術A	<p>美術A部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者9名、文部科学大臣新人賞候補者12名の推薦があった。第一次選考審査会では、全候補者の推薦書や資料を基に、審査員全員で慎重に協議し、文部科学大臣賞候補者4名、文部科学大臣新人賞候補者6名を第二次選考審査会へ進めた。</p> <p>第二次選考審査会では、絞り込まれた候補者の業績について再度協議した後、投票を実施。投票で同数となった場合は全審査員の意見を求め、再投票の結果、選考審査員の総意として文部科学大臣賞2名、文部科学大臣新人賞2名を決定した。</p> <p>文部科学大臣賞は、木彫(もくちょう)の安藤榮作氏と、多彩なメディアを駆使する岡崎乾二郎氏が受賞。いずれも長いキャリアの集大成となる美術館での充実した個展が評価された。文部科学大臣新人賞は、漆による特異な人物像を制作する青木千絵氏と、美術館の空間全体を作品化した玉山拓郎氏が受賞し、今後の展開が期待されると高く評価された。</p>
美術B	<p>美術B部門では、選考審査員及び推薦委員から文部科学大臣賞候補者10名、文部科学大臣新人賞候補者12名が推薦された。第一次選考審査会では候補者の作品や活動について、推薦理由及び資料を基に、意見交換を行った上で、投票を行い文部科学大臣賞は5名、文部科学大臣新人賞は6名に候補者を絞り込んだ。</p> <p>第二次選考審査会では、候補者の活動、推薦理由について改めて確認をした上で複数回の投票の結果、文部科学大臣賞に深澤直人氏、文部科学大臣新人賞にevala氏、永山祐子氏を選出した。</p> <p>深澤氏は「デザイン」を真摯に問う活動を続けてきた中で、これまでの仕事の集大成とも言える回顧展により、その業績が国際的にも高く評価された。evala氏は立体音響技術を用い、未知のサウンド体験を可能とした。永山氏は環境負荷の低減等を重視し、持続可能な社会に向けた建築の在り方を指し示した。</p>
メディア芸術	<p>メディア芸術部門では、選考審査員及び推薦委員から文部科学大臣賞候補14名、文部科学大臣新人賞候補は18名が推薦され、第一次選考審査会で文部科学大臣賞6名、文部科学大臣新人賞11名に絞られた。第二次選考審査会では、多くの委員が鶴巻和哉氏の「機動戦士 Gundam GQuuuuuuX」を挙げた。シリーズ新作にして初代の架空戦記である斬新なIPのリブランディングを評価し、文部科学大臣賞に選出した。また、「ダンシング・ゼネレーション senior」の榎村さとる氏に対して、50年を超え月間連載の執筆を続ける姿勢と、年代と共に世代のリアルな物語を描く作風を評価し、もう一名の文部科学大臣賞となった。文部科学大臣新人賞は、各分野から多彩な候補が出揃(でそろ)い、委員による議論が白熱したが、多角的な審議を経て、二名を文部科学大臣新人賞として選出した。一名は「ダンダダン」でグローバルに若い世代の注目を集めている龍幸伸氏。多様な要素をハイテンポでパワフルに、かつ繊細に描く作風に多くの評価が集まった。そしてもう一名は、『劇場版「鬼滅の刃」無限城編 第一章 猗窩座再来』竈門炭治郎役などに出演の花江夏樹氏。多くの作品で様々なキャラクターを演じた功績で、新たなジャンルを創造していると評価。声優としてメディア芸術部門初の受賞となった。</p>

令和7年度(第76回)芸術選奨選考経過一覧

部門	選考経過
放送	<p>放送部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補に15名、文部科学大臣新人賞候補に15名の推薦があった。第一次選考審査会では、候補者の業績について様々な視点から意見が交わされ、文部科学大臣賞候補5名、文部科学大臣新人賞候補7名に絞られた。</p> <p>第二次選考審査会では、両賞ともに絞り込まれた候補者の業績について改めて議論。文部科学大臣賞には、演出家として脚本や出演者の演技を統合して、一筋縄では語れない戦争の悲劇をドラマに仕立て上げた柴田岳志氏と、多くの取材対象者に粘り強く迫り続けた成果として、出色のドキュメンタリーを生み出したディレクター・プロデューサーの四元良隆氏が選出された。文部科学大臣新人賞には、日常会話の中に鋭い人間観察を織り交ぜる作風などが高く評価された脚本家のバカリズム氏、個人の物語でありながら歴史の闇の部分をも掘り起こすドラマを制作したプロデューサーの新井順子氏が選出された。両氏とも、これまで多くの優れた番組に参画しており、将来の更なる飛躍が期待されるとして、今回、文部科学大臣新人賞として顕彰することになった。</p>
大衆芸能	<p>大衆芸能部門では、選考審査員及び推薦委員から文部科学大臣賞候補として14名、文部科学大臣新人賞候補として15名が推薦された。第一次選考審査会では、文部科学大臣賞候補として5名、文部科学大臣新人賞候補として8名に絞り込んだ。第二次選考委員会で審議を重ねた結果、文部科学大臣賞は、シュガーベイブでのデビューから50年という節目の年に、コンサートで独自の音楽性を再認識させてくれた音楽家の大貫妙子氏、さらに年始の武道館公演及び全国ツアーでの卓越した模写芸を軸としたエンターテインメントを披露したタレントの清水ミチコ氏の2名を選出した。同じく文部科学大臣新人賞は、太神楽曲芸(だいかぐらぎょくげい)のエキスパートとして寄席の空気を華やかに彩る翁家助和氏、さらに浪曲師として60数年ぶりに新宿末廣亭1月下席(しもせき)の主任(トリ)を務めるなど名実ともに高い評価を得た玉川太福氏の2名を選出した。結果的に文部科学大臣賞の2名、文部科学大臣新人賞の2名、いずれも「大衆芸能」の領域の広さを示す贈賞となった。</p>
芸術振興	<p>芸術振興部門では、選考審査員、推薦委員、及び他部門から、文部科学大臣賞候補者として23名、文部科学大臣新人賞候補者として17名の推薦があった。第一次選考審査の結果、文部科学大臣賞、文部科学大臣新人賞ともに5名に候補者が絞られ、第二次選考審査の結果、文部科学大臣賞に、さっぽろ天神山(てんじんやま)アートスタジオのディレクターとして、日本のアーティスト・イン・レジデンスの発展に貢献した小田井真美氏、法律家として、文化芸術における著作権を通じた基盤整備を推進した福井健策氏の2名が選出された。文部科学大臣新人賞には、映画、演劇、社会実践等を通して「ろう文化」の芸術活動を展開した牧原依里氏、ビジュアル・アートディレクターとして「中之条ビエンナーレ2025」が高い評価を得た山重徹夫氏の2名が選出された。文化芸術分野での独創的で幅広い活動や社会貢献が評価の基準となる芸術振興部門において、クリエイター、プロデューサー、キュレーターといった現場の人材に限らず、様々な形で後方支援に携わる人材が評価されることが期待される。</p>
評論	<p>評論部門では、選考審査員及び推薦委員から文部科学大臣賞候補者として26名、文部科学大臣新人賞候補者として18名が推薦された。第一次選考審査会では、推薦書類の内容を吟味しつつ慎重に審議を行い、文部科学大臣賞は6名、文部科学大臣新人賞は3名の候補者に絞り込んだ。</p> <p>第二次選考審査会では、多様な芸術ジャンルに目配りしながら、各候補者の著作について真摯な議論を交わした結果、文部科学大臣賞に大出敦氏と松隈洋氏を選出した。大出氏の「余白の形而上学(けいじょうがく) ポール・クローデルと日本思想」は、駐日フランス大使であった詩人・劇作家が、能など日本の芸術を媒介に、キリスト教徒として日本思想と対峙する様を解明した重厚な評論である。松隈氏の「未完の建築 前川國男論・戦後編」は、ル・コルビュジエの薫陶を受け、日本のモダニズム建築を牽引(けんいん)した建築家の作品と思想を、時代の中に位置付けて詳述した集大成的な評伝である。文部科学大臣新人賞は、ザヘラ・モハッラミプール氏に決定した。「東洋」の変貌 近代日本の美術史像とペルシア」は、サーサーン朝ペルシアの美術が近代日本において「東洋美術」と見なされる歴史的な過程を、徹底的な資料調査を通して跡付けた労作で、高い評価に値する。</p>